

## 社会調査士第一世代

な しば架空の話をさせていただく。本協会  
の前身、社会調査士資格認定機構の誕生  
から来年で20年になる。さらに10年たてば30  
年、ひと世代が経過する。そのころ、社会調査士  
資格取得第1号の人は50代前半で、その子供が  
大学生になっている可能性は十分に考えられる。  
この学生が、もしも本制度と向きあっていて親  
にアドバイスを求めたとしたら、親はわが子に  
この資格の取得をすすめるだろうか。

論理的には30年間の社会調査士資格取得者  
全員で母集団を作り、アンケート調査を実施す  
れば、「社会調査士第一世代」の意識の構成はあ  
るていど把握できることになる。しかし、じっ  
さいにはそのような母集団の構築など不可能  
であろう。それで「架空の話」なのである。

私は、助手のころから毎年のように社会調査  
の実習や調査関連の講義を担当してきた。そ  
して、この「機構＝協会」が発足してからは、年  
度があらたまるたびに受講生から同じことを  
尋ねられた——「この資格は何の役に立つので  
すか？」

私の答えは、全国の大学でこの制度を運用し  
ておられる先生方とおそらく同じであろう。「社  
会調査士資格は教員免許や司書資格などとは性  
質が異なります。なにか専門的職員になるため  
の通行手形ではありません。しかし、2つの点で  
あなたの存在が社会的に証明されます。1つは「社  
会調査」がきちんとできる人であるということ。

もう1つは、あなたが「個人情報」を適切に扱え  
る人であるということ」。さらに続けて、「だか  
ら、就活の面接ではこの資格の特徴を積極的に  
アピールしたらよい」と。

すると、就活を終えてキャンパスにもどっ  
てきた学生たちがこんな報告をする。「面接で社  
会調査士制度について説明したら私の卒論研究  
に興味をもってくれて、かなりの時間を割いて  
調査の方法や体験など、いろいろと質問されま  
した」——そう言って爽やかな笑みを見せるの  
である。卒業生からも、就職先の企業で新規事  
業のための調査プロジェクトが立ち上がったとき、  
社会調査士資格があるというので思いがけずも  
その部署に配属された、といった類いの報告を  
何度か聞いた。

『社会と調査』は創刊号からずっと「働く社会  
調査士」という資格取得者の自己紹介コラムを、  
見開き2ページで連載している。長期連載だか  
ら、全部集めればかなりの人間群像となる。協  
会ホームページの「学生サイト」でも一部を公開  
中だが、こうした社会調査士が活躍する姿を高  
校生にももっと見てもらったらよいと思う。こ  
れから10年など、あつという間である。社会調  
査をめぐる目下の状況に難問が山積で、とても  
手が回らないと言われそうだが、「社会調査士  
第一世代」の成果と課題をまとめて次世代に引  
き継ぐことを、今後10年間のどこかの時点で検  
討してみるのもよいのではないだろうか。

谷 富夫

社会調査協会 理事